

雪舟トークング

テーマ「雪舟と田川」

講師 郷土史家 藤澤博文

司会

皆様、大変おまたせいたしました。準備が整いました。

私ども田川には本当にたくさんの良い先生方がいらっしゃるわけですが、地元でございます郷土史家の藤澤博文先生をご紹介申し上げます。約1時間の講演ですが、皆様のお手元の資料にも先生のプロフィールはご紹介させていただいております。皆様にはわかりにくいかと存じますが、地元と申し上げてよろしいのではないかと思います、この川崎町のお隣の添田中学、大任中学の校長を経まして、この近隣は京都郡と申しますが京都郡教育出張所の所長を経まして、県の人事管理主事、京築教育事務所長を経まして、現在玉川大学の通信教育非常勤講師でいらっしゃいます。著書といたしましては、皆様には添田の英彦山と言えわかりますでしょうか、添田町史、それから京築文化史を連載しておられました。賞といたしましては、県の教育文化功労賞を受賞しております藤澤博文先生をご紹介申し上げます。これから「雪舟と田川」をテーマにしてご講演をいただきます。どうぞ、お迎え下さい。(拍手)

藤澤博文(郷土史家)

皆様こんにちわ。ただいまご紹介いただきました藤澤博文でございます。今日のこの雪舟セミットで田川と雪舟に関わることをお話申し上げる機会をいただきましたことを大変光栄に思っております。

実は、お手元に今資料として4枚と年表が2枚。6枚ほどお手元にさしあげておりますので、1時間の時間の中でこの内容を私が申し上げねばならないわけですが、始めにこの雪舟サミットに本当に期待し、力をつくされた3人の方をご紹介申し上げます。明日皆様がいいらっしゃる川崎町の旧安真木村に荒平集落というところがありますが、そこにある雪舟庭の前の当主が1年半前に急逝なさったわけです。この方については、室町の時代から約500年にわたってこの雪舟庭を守りつづけてきた最後の方であった。今奥様がその当主になっておりますが、ながい筑豊文化不毛の地といいながらも、このように守ってきたという素晴らしいご家庭でございます。また、これは川崎町、荒平集落の皆様もよくぞ守ってきたなということでもあります。この方が最初のお一人です。

2人目には、同じこの安真木の地区に吉田基衛という元校長先生がおられました。今年の5月に急逝されたわけです。それが私にお鉢がまわってきたわけでございます。

3人目の方は14年前に亡くなったという、この雪舟庭の前当主の甥子さんであった佐藤さんという方で、九州芸工大の卒業論文に雪舟庭のことを書いて、後程トラペンアップでおみせしますが、この石組みとか池を実測しまして、深さは40cmで浅いけれども深く見せている等を書いた方です。このお三人の方の霊に、私は深くお礼の言葉を申し上げた

いと思っております。そういうことで、資料には“はじめに”と書いておりますが、このお三人のご紹介をしながら、トークを受ける経緯をお話いたしますと20～30分かかりますが、川崎町の熱意と教育長さんの押しの強さと説得力に負けまして、しかも私は横文字に弱いものですから、トークと申しますと4～5人で雪舟について座談会をするというような誤解をいたしておりました。それで受けたのが今日のトークでありまして、私は大変なことを受けたと思ったわけですが、引くに引かれず、こうして壇上に立たせていただいております次第でございます。そういう経緯があるわけですが、本当は吉田基衛校長さんが真崎を愛して、川崎を愛して、その中から雪舟庭のことを語りたいということだったんですが、急病で亡くなったということを始めに申し上げておきます。そこで次の資料でこういうことを書いています。それは取組み、参考図書、年表というこの流れを少しだけお話したいと思えます。

私はまったく雪舟のせの字も知らないような立場でございますので、今日ここで語ることはおこがましいことなんですが、先程申しましたようにやらざるをえなくなりました。そこで取組みを話しますと九州大学国史学の中村教授という、日頃からお世話になっておる方にご相談させていただいたところ、それは中世史あるいは美術史の先生にも紹介しよう、それからなんといっても県の文化課に早く行って、この魚樂園を名勝に指定した時の資料があるはずであるということでした。また英彦山の亀石坊、この亀石坊は田川では雪舟の庭といえば魚樂園と亀石坊は対句になるほどですので、亀石坊にも行きました。いろんな資料を県文化課の倉庫から掘り出してきて、本当に時間がかかりました。お話を聞いたのが1ヶ月前ですから、いかにあわただしいか皆さんにはおわかりかと思えます。それから、県立図書館に8回足を運びました。図書館の方にもご協力いただいて、たくさんの資料を見ました。構えがしっかりしていないので、驚くばかりでした。私は少し痩せ気味だったんですが、さらに痩せてきたんです。

こういうようにして地元の田川市の図書館、川崎の図書館、添田町の図書館、魚樂園、亀石坊の伊藤さんなどの門をあわただしくたたきながら、やはり一度は山口、益田、総社、大野、芳井を訪ねたかったのですが、行けないままでした。こういうふうに動きながら、図書としましては、私が手にしたのは24～25冊で、県立図書館の方が選びだしてくれて特別貸出までしてくれました。

私の資料作りにご縁のある図書をちょっとご紹介いたしますと、田中一政さんとか沼田さん、あるいは熊谷信夫先生とか吉村貞司先生、井上蘭崖さん、この方は大正の初期から12～13年頃にかけて画家であるこの方の「筑紫史談」という本は、私がびっくりするようなことをかいてました。あるいは4行目にある氷見健一さんという方、この方は九州大学の教授でございます。そして後程申し上げる、スライドも作っていただきましたが、田川に、あるいは糸島に、若杉の篠栗町に、あるいは日田の方に、三郷村にと、これは雪舟の庭なのかどうかということを実際に検証しながら出されたレポートも読ませてくださいました。郷土史「かわさき」とか、日本庭園史、庭の勉強もさせていただきました。

そういうことは、時間があまりございませんので先へ進みますけれども、スライドを作るについては、川崎町の非常勤職員である村島朴先生が、雨の日も、あるいは見えない英彦山の写真を撮るために度々動くというようなご苦労をしてくださいました。こうして年表を作りました。図書館には年表が載った本がないということで、読みながら抜き書きをしたのが終わりの方の2枚でして、この中には誤りもあり、足りないところもあると思うんですが、しかし、頭に入りました。それは一生懸命にするしかしかたがないという覚悟から生まれたものでございます。試験の一夜漬けというのを私も経験いたしておりますが、まさに一夜漬けの勉強で、毎晩1時2時という日もありました。昼はちょっと転寝をしてまたということでした。だから、雪舟という人に触れてみて、驚くことがたくさん発見されました。

こういうわけで、そこにもあげておりますが、雪舟の年表を作るに当っては雪舟の作品で、絵に賛が入っております。そのお友達が書いた賛、中国の人が書いた賛、賛というのは文章で、その絵に対するところのお誉めの言葉がある、それが年号があり場所が書かれているところで、これが年表づくりの点になってくるわけでございます。そういうようなものがブリジストンの石橋さんのところの美術館とか、あるいは東京、京都の国立博物館にあるとか、あるいはすでに無くなっているが無写本として後の狩野派の人たちによって、あるいは弟子の秋月とか宗淵とかいった人たちによって書かれている、その他大名家にだいいぶおさまっている前田家、反町家、黒田家、小笠原家、島津家に収蔵されている作品がたくさんあるそうでございます。アメリカのボストンの博物館にもあると書かれております。

雪舟の年表を作ってみて、点しかわからないんです。そして、先程ご出席の市・町長さんが雪舟さんが亡くなったのはうちの市だ、うちの町だとおっしゃってりましたが、少なくとも3ヶ所の説がある、もしかしたら行き倒れではないかという説もあるくらい凄まじい終焉を迎えた方なんです。そういう雪舟の点と点をつないでなかなか線にならない、ましてや面へ広がらないということを申し上げて、それだけに私は夢が広がるなとも思いました。また、悪く言えば無責任でも適当に言ってもわからないと知恵付けしてくれる人もおりました。しかし、そういうわけにはいきません。なにせ今日は皆様雪舟研究の先達ですから、そういういい加減なことは許されません。しかし、私がいかに勉強してもわかりませんので、曖昧模糊としたところがたくさんあるということをご了承いただきたいと思っております。

夢は膨らみます。雪舟という方については、今の流行の言葉でいえば“ロマンがある”と思うんです。そこで、1ページの下の方に書いてありますが、雪舟は本当に田川に来たのか、九州に足を運んだのか、何できたのか、また、雪舟という絵描さんと庭を作った雪舟とは別人ではないかこの地方では絶えず言われることなんです。だから皆さん方はそうかなと思われる場合もあるわけです。しかし、今日は雪舟サミットの語りをする講師ですから、雪舟は来たんだという確信をもってこの壇上にきております。ところが、読んだ

本の中にそれはおもしろい本がありました。一つだけご紹介しております。釈迦にはダイバがおりますし、敵がかならずいるということで、外山英一という人が昭和9年頃にした有名な「史文閣」から出た本があるんですが、その「史文閣」から出した昭和9年の「室町時代の庭園史」という本、これは昭和45年に復刻版が出ておりますが、その中に先程申しましたが氷見教授に「氷見君よ、もう少し勉強しろ」と書いている。東京大学の駒場の林学さんに「駒場の言っていることはおかしい。もう少し庭園について勉強しろ」と書いてある。この内容について話しても皆さんがわくような内容がかいてある。ちょっと申し上げますと、ある文部省の庭園を指定する人は、ある市の庭園については七五三の地割りをしている。子供の七五三でもあるまいにというふうな悪口雑言を書いている本を読みまして、私は愉快になりましたけれど、しかしけしからんなというふうに思いました。これを暴露すれば或る市長さんは必ず怒ると思いますので、この話はこれくらいにとめまして、雪舟と同じ名前の人がいるんじゃないか、一番下にこういうことを書いている、雪舟等楊と雪舟嘉猷という人がいた。嘉猷というのは博多の承天寺というお寺のお坊さんで、やがて安芸の国広島のお寺の住職になったという人です。雪舟と名乗った人は能登の方にもいたと書いてある。これを考証しているのが井上蘭崖という大正十何年頃まで活躍した画家で、県立図書館にある「筑紫史談」という本の中にもおもしろく書いてあって、築庭の雪舟は確かにいたといえます。

さて、そういうことをご紹介しながら1ページ目の上に雪舟の生涯ということを書いています。その前にプリントに間違いがあります。これはワープロで打っていただいた中に変換で違いがあります。ちょっと見ていただくと、漂泊が漂泊、陸上は上陸、意外は以外、天開図画桜の桜は楼など他にも間違いがあろうかと思いますが一括して申しておきます。

そこで雪舟の生涯でございますが、時間がきてもさっと終れるようにここでまとめをしておきます。

雪舟はどのような生涯をおくったか、皆様よくご存じだと思いますが私は知らなかった。本当に確実にそうかなと勉強しながら思ったのは、雪舟は漂泊の人である、流浪の人であるということです。雪舟がどこで死んだかわからないと本にも書いてるんです。山口の方は山口で、益田の方は益田で、芳井の方は芳井で死んだといってるんですが、それも正しいと思うんです。しかし、雪舟が亡くなったのは87歳、山口です。83歳、益田か芳井、その87歳という死後、牧松周省という40年来の友達が彼の訃報を伝え聞いてやってきた。そして雲谷庵、雲谷軒ともいいますが、山口の天花山の麓にいたところ、画室に雪舟の遺作が書かれていた。山水図といって現在では本の写真にもよく出ています。その中には賛もあるが、彼は雪舟が死んだ悼みの詩を作ったというんです。その一片をそこに書いてあります。「東に漂い西に泊り舟千里 北郭南涯夢一場我もまた相従って帰去せんと欲す青山聳ゆる処 これ家郷」西に東に漂って、中国に行ってますから本当に千里でしょう。あるいは南の城の南郭、北の果てまで、このような流れの中で私も貴方の後を追って行くが、人生至る所に青山ありという詩があるように、青山これは家郷とよんでいるのは、彼

はどこかで野たれ死にという表現は悪いですが、行き倒れて死んでいるかもしれないというのは、ここからも説がでているようでございます。

いずれにしても、漂泊の人なんです。正に彼の歩いている道を早口で申し上げると、彼は総社市の赤浜で生まれて京都に上っています。地元のお寺に入ったという説もあります。そして京都から山口に、あるいは中国に、そして九州の豊前・豊後、あるいは筑前・筑後の方まで動いたという説もあります。そしてまた山口に帰り、島根の益田、広島安芸の国を通り、京都にもまた行き、遠くは関東静岡を通り、東北の山形、立石寺の風景も描いており、中国からの帰りには薩摩に上陸したという意見もあります。あるいは堺に。それから、朝鮮の使いが対馬に来たときに、雪舟の絵に賛があるというので対馬にも行ったんじゃないかというふうにすごい行動半径をもっています。このような雪舟さんですが、私は写真で見ただけですが、遺作の山水図の中には不思議と水平線が書かれている。雪舟は「山水長巻」にしても水平線を描いていないのが特色であるといわれているんです。なのに最後の一作には水平線がかかれてました。解説者はそれを“死の国”と解説しています。そこには雪舟の特色あるぎぎとした山が描かれている。水平線が描かれている。彼は死の国を望んだのか。牧松周省の詩が飾る素晴らしい絵であるのか。ちなみに、雪舟の絵は女の人不思議と描かれていないというのが、美術史の中に解説が出ているそうです。ただ中国で描いた人物の模写のところには4～5名を描いているけれども、それ以外の大きな大作の中には老人・若者・男達を描いているけれど、女は描いていない。雪舟は女嫌いであったのではないだろうかとか、大きな恋に破れたのではないだろうかというような説があるのもそういうところからではないでしょうか。雪舟が生きた時代でおさえおかなければならないのは、正に暗黒の中世であったということです。やがて雪舟が明に行くときには、応任の乱が起こるんです。下剋上といって下が上を殺し、やがて国が戦乱で荒れてしまう時期が来るんです。その前夜が雪舟の生まれたときである。解説の中にある言葉を私はまとめました。殺し合い、謀略、謀反、略奪、凌辱、追い剥ぎ、野党、盗賊、下剋上、貸した金は棒引きにせよという徳政令も将軍に要求する声が各所にある。まさに生き地獄である。この中の凌辱についてみると、後花園天皇は応任の乱が起こる前なんです。その時御所に50～60人の賊どもが攻め込んできた。帝に刃を向けた。公家さんたちはその刀を抜いて、必死に帝を逃がしたと書いてあります。そしてそこにいた内侍とか、女房という十二単を着た女のひとの着物をはぎ取って暴行を加えた、犯すわけです。皇居でさえもそんなことが行われる。ましてや、外は飢餓、日照りが続いて食べ物がない。乞食が充満していた。皆様にお配りした年表の終りから2枚目を見てください。1420年の2行目のところに「このころ炎旱・飢餓等全国に充満、餓死する者多し」というような記事がでています。朝鮮、韓国から来た使いのときもこのことが書かれています。現在の日本はこんなに豊かになっていますが、けれどもこの時代は恐ろしい時代であった。だから絵筆を持ってる雪舟は、画僧だから殺されないというわけじゃないんです。あちらに行き、こちらに行く雪舟は命を的にして漂泊以外にない歩き回ったんです。皆さんご存じの山

下清、漂泊の詩人種田山頭火。山下清は劇等でよくみえますけれども、彼があのようにとぼけた味が出せるのは現代の日本が素晴らしく平和だからなんです。ところが、いまから500年前は暗黒の中世だった。これを思うと雪舟がいかにも恐ろしい時代を生きたか、まさに命を的にした漂泊であったと私は感じたのでございます。この時代の漂泊はすごいものであったということを認識しながら、この人の少年時代、青年時代、青壮年時代、老年時代をたどっていきたいと思います。

そこで、デジメの少年期というのを見てください。あるいは青壮年期というのを見てください。年表のほうの終りから2枚目を見てみると、雪舟が生まれたのは備中の赤浜、現在の総社市であるといわれています。小田氏とか藤原氏とか私は時代考証は十分わかりませんが、読んだ本では源氏等の説がある。相国寺がそのころ大井というところの荘園を持っていた。だから雪舟は11歳の頃に相国寺に入ったのではないか。いやそうではなくて、12歳の頃に宝福寺にはいったのではないかとそこにも書いていますが、和尚さんに本堂でくくりつけられて、流した涙でかいたネズミの絵がまさに迫真、今にもとびかかろうとするほどであったので、和尚が縄をといたという知識しか私にはありません。ところが専門家の本はいちやもんをつけるのが皆好きですから、そんなことはありえない、これは170年後の狩野永納という人が「日本画史」という本の中で書いたんだというような説を書いています。原書を見たわけではありませんので私にはよくわかりませんが、少なくとも後に書かれた絵だと。しかし雪舟は子供心にも絵心をもっていたし、どこかで絵を習おうとしていたことは事実だと思うんです。その程度にいたしまして、年表では11歳かすくなくとも12歳のころに京都の五山の一つである相国寺に入っている。そこでは春林周藤という方、この方は第36代の相国寺の住持、和尚さんになっている。そして後には僧録司、お寺の人事を10年間扱うという、いうなればお寺の権力者になっている。この人の弟子になって等楊という師匠の名前の一部をもらっているんです。こういうものを読んでかわいがられていたんだと。始めは喝食といって前髪をおとさないで仕えていた。そこで2枚目を見ていただくと、そこに資料がございまして、早口でございましてちょっとご紹介いたします。京都五山は室町時代に五つの寺がありました。南禅寺は別格としまして天竜寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万寿寺とありまして、そこにそれぞれの住持がおられる。住持の下にこのような僧制があったようです。東班と西班に分かれていて、東班には都寺・監寺・副寺・直蔵・典座とあり、これは経済を扱う職制であった。西班は首座・書記・座主・知家・殿司・浴主とあり、これは修業とか文化を扱う方でした。その上にいるのが住職で、その住職が春林周藤であった。各お寺にはこういう組織があった。カッコをして喝食と書いてあるのは、まだ僧になっておらず下働きをするのが喝食であった。雪舟はこの喝食になり、かわいがられたんでしょう、等楊という名前をもらったんです。

ここで資料を先にお話しておきます。

京都の禅宗は臨済禅が中心でございまして、永平寺がご承知の曹洞禅ですから。禅宗というのは、例えばこのあたりにたくさんあります真宗というのは全て仏様におまかせすると

いう他力という宗教に対して、臨済は自ら悟りを開くという自力の宗教です。そして和尚さんから一つのテーマを与えられる、つまり考案を受けて座禅をする。静かにすわって思いをめぐらし、自らを厳しく鍛えるという凄まじい取組みをしていくわけです。はその春林周藤の禅の教育を最初に受けていたようです。そして禅に打ち込ませて勉強は朱子学と、絵の勉強はあまりさせなかったようです。だから35歳位から40歳位まで、雪舟が絵描きであったというようなことはあまりでていないんです。しかし、密かにやっておったであろうと思います。だから、雪舟は大器晩成であると書かれることが多いんです。子供の頃からの天才であったかと思ったら、そうではないという書き方が多いんです。

足利將軍の系譜も関係があります。1代から15代、その中で特に雪舟に関係のあるのは出会いは無いけれども3代の義満、もちろんこれは前の人ですが、北山文化といって京都の北の方に金閣寺を作った人なんです。8代將軍の義政が東山文化といって、京都の東山に銀閣寺を作った人なんです。外は応任の乱で荒れているに能をやり、書院づくりの家を作ったり、花を活け、香をたき、このような水墨画をかき、築庭するというわび・さびの世界、枯淡さを求める世界に埋没していくんですが、それでもなかなかのやり手だったのがこの義政だったんです。又、先程下剋上ということを行いました。これを説明しておきますと、將軍のところで6代の義教とかいてる人は、部下の赤松氏から屋敷に招かれて殺されるんです。この時から將軍義教は、少なくとも強かったんですが、部下から首をとられて、そして赤松氏は故郷の播磨に帰ってしまう。今まで権力の象徴であった將軍が部下から殺されてしまうという、このショッキングな事がやがて下剋上、実力あるもの、下の者が上の者を殺すという大変なことになっていくんです。

次に師匠としてはどういう人にめぐりあったかということ、春林周等この人は雪舟が死ぬまで禅の厳しさを教えてくれた人といいいいでしょう。そして絵の世界としては如雪、やはり相国寺にいたお坊さんで、東班という経済のほうを扱っていた人で如雪、その弟子の周文の流れを汲んだといわれています。しかし周文はなかなかのやり手で、商売気もあったというので精神的にはどうであったか、しかし義政に近づいて御用絵師になったという方です。雪舟は如雪や周文は絵の師であるを書いてるんです。だからある時には感動を受けたと思うんです。

友達では牧松周省、これは死んだ時に駆けつけてきてくれた詩人なんです。あるいは桂庵玄樹、この人は天開図画楼記を山口で書いたという人なんです。万里集九という人は美濃のお寺にいたといえます。皇羽之恵鳳という人はやはりおおきな友達で、京都にもいた人なんです。最後の呆夫良心という人もよくでます。大分の豊後、大野町の近くで天開図画楼のアトリエを作り、天開図画楼記を書いた人なんです。こういうような人を雪舟にかかわる有名な人として記録しました。

弟子としては雪舟は自分の派をつくってないんです。けれども素晴らしい弟子がでます。やがてこれは受け継がれて狩野派の方に、あるいはいろんな派にいきますが、直接の弟子は秋月とか等悦、宗淵、雪村という人が弟子としてあげられています。

このようにして雪舟に関わる少年期、青壮年期を申し上げてきましたが、ここで川崎というのがどこにあったかということをご説明しておきます。(スライド)ここが川崎です。ここが田川郡です。山口からこれらの方はご存じでしょうが、これが北九州です。福岡市というのは、雪舟が中国からの帰りに上陸したのではないかというのがこの辺りで、この辺りが糸島郡、この辺りが芦屋というところですよ。こういう所が後ほど関わってまいります。それから、大分県の大野はこの辺りになります。川崎の隣が添田になります。後ほどスライドがでますが、香春というのがこの辺りです。田川郡に雪舟がどのようにして来たのかという本論に入らないと大変なことになりますので、はやく進んでいきたいと思いません。

それから、ここでちょっと有名な、山口の方に借りにいったと申したいんですが、雪舟を語るときに雪舟とはどんな人かという自画像が残念ながらございませんので、これは等楊という人が描いた雪舟が75歳の時の絵だというものです。雪舟は実に穏やかな顔をしております。そしてこの雪舟の人柄はお金に執着しない、周文は絵を売り込んでお金を得ることに非常に力を入れたとかいてありますが、お金とか冥利とかを追求しなかった。師匠の春林についてもそうであった。雪舟は中国に行ってもそうであったので、みんなから非常に奉られたということです。実は私の友達が、鴻の池からでた雪舟の絵を貸すといっていたので私は心待ちにしていたのですが、倉庫から出にくいということで来ませんでした。いまこの素晴らしい秋冬山水図をトラペンアップしていますが、雪舟はこういうような特色のある絵をかいている。これがもっと良いトラペンアップだったらあつというものです、まあこういうものです。

先程の師匠雪舟がどんな系譜の人だったかというのは大切なんです。雪舟は周文を自分の師匠だというけれども、周文は自分の流れを小栗宗湛の方にゆずってるんです。これは非常に大切なことなんです。曾我蛇足、このような人がおりますが、これにゆずっている。この人は一口でいえば、小栗宗湛もたしかに素晴らしいんですが、宋時代のお手本を模写する流れにいたといわれています。雪舟はそうではなくて、中国に行けば中国の山を見て、だから中国での雪舟の動きはわからないといわれていて、自然と対話してその自然の感動をそのままスケッチしたというのが総合的なまとめなんです。雪舟という人はいかに凄まじい人か。日本に帰ってもこの人が描いた絵は、例えば山形の立石寺とか、うちの山に似ているとか、英彦山にすれば裏英彦山のぎきとした絵を中国の山を思い図りながら描いたんじゃないかというふうな説がでてくるわけでございます。

まだ1枚目をうろうろしていますが、2枚目3枚目の内容が多いので早口でございますが、先に進みたいと思いません。この中で大切なのは、30代~40代にかけて雪舟はここを去っているんです。ここというのはどこかということ、先程地位を言うのを忘れていましたが、雪舟は先程の僧制の中で喝食という位の後に知家という位になっているんです。だいたい接待係なんです。そしてこの間で、將軍義政のところへ、師匠の僧録司である春林周等のお使いに行ったりしているんです。この位にありながら雪舟は、忽然として広島へ

行ったか、あるいは最後は山口へ行っただろうといわれています。雪舟はなぜ五山を捨てたのか、その時の名乗りはまだ雪舟ではなくて雲谷であった。あるいは晦菴であった。雲谷・晦菴というのは中国の朱子学の宋時代に活躍した朱子の号なんです。だから、その当時春林周等は朱子学を嫌っていたけれども、雪舟は朱子学に没頭したのではないかという説もあるくらいです。しかし、その頃すでに絵もかいていただろうというのは、西の西周、つまり周防の国で子供や一般の兵隊が「雪舟とは素晴らしい絵描きだ」という文章もあるくらいなので、雪舟はその頃密かに周文の絵に感動したところがあって、あるいは義政將軍の中国のコレクションをみて感動して、絵を模写していったのではないかと思います。2枚目の雪舟が去った7つの内容は雪舟の放浪の原因でもあります。それはここにも書いていますが、一つ目は師の春林周等と性格があまりにも似ている。衝突したのではないだろうか。性格上の不一致というのがありますね。パッと花火を散らした。だから去ったのではないだろうか。2つ目は絵に目覚めたのではないだろうか。京都にいるときに、自分には周文は冷たいかもしれないが、その絵に感動したのではないだろうか。絵心を誘われたのではないだろうか。義政のところでは宋時代の素晴らしい絵に感動したかもしれない。3つ目は宗教の腐敗を見て、相国寺のお坊さんでさえも武器を持って寺を守っている。僧兵になっている。女を囲っている。理屈をつけて女を自分のところへおいている。当時日本に来たザビエルはそういう日記を書いているそうです。「日本ではまさに世俗化している。」それとも雪舟自身が大転機を受けたのではないか。彼も人間ですから大きな失恋をしてショックを受けたのではないか。または暴力を受けたのではないか。無秩序の時代を見て、「何が禅か。禅の勉強どころではない。朱子学の勉強どころではない。」とって忽然と姿を消したのではないか。お坊さんや学者を優遇してくれた山口の大内侯に誘われて、京都には見きりをつけて大内に行ったのではないだろうか。あるいは、その頃の大内は遣明船の中心だったんですが、その船に乗ろうと思ったのではないだろうか。こういうようにして、いくつかの原因が考えられるんですが、これらの原因が複合したたのではないかと考えられます。

あと20分程なので急がなければならないのですが、壮年期、ここで大切なのは雪舟は遣明船に乗っていくんです。この船は三隻あるんですが、1号船は幕府、2号船は細川、3号船は大内氏が作る。そしてそこに書いていますが、五島の奈留に集まって風待するんです。2ヶ月かかったというんですが、航海に2ヶ月はかかりません。風待するのに時間がかかったんです。その待っている間に博多で台風にあたり、応任の乱が起こったりしたんです。だから今で三隻一緒に行こうといていたのが、細川と大内の内、大内は山名の方ですから敵対するので一緒には行けなくなる。こうして1号船の幕府の船は次の年しか来ません。2号船と3号船、雪舟は3号船で寧波というところに着くんです。揚子江の流れているところで、その運河ののって北京まで行ったといわれます。そこで大切なのが雪舟が第一座、禅宗の総本山で最高の位、雪舟が行く時は知家というまだ和尚にもなっていない人なんです。正使の使いでもない彼がトップにあげられた。しかも今度は北京に

行ったら壁画を頼まれた。やはり雪舟は密かに絵の勉強をしていたんでしょう。そこで雪舟はすごい栄光を受けるわけです。中国でも雪舟は他にあまり名前があがっていません。四季山水図をかいたとか富士の絵をかいたといわれていますが、そこで学ぶ破墨法とかいろいろな運筆は勉強したでしょうけれども、自然を材料にスケッチをした。ここに雪舟のすごい目の開き方があった。雪舟はむこうでもお金を取らない絵描きさんという人柄で詩をたくさん贈られたりしていますが、雪舟はこの時から雪舟と名乗っています。日本禅人雪舟とか雪舟等楊と名乗っているんです。この説についてもいろいろございしますが、省略いたしまして、そのあと雪舟が帰ってくるんですが、帰ってきた先が実はこの田川なんです。なぜストレートに山口に帰ってこなかったか。それは応任の乱が続いていたからです。それでは博多に帰ったかということ、博多に帰ろうとしたら大内氏の反対派減少貳氏が頑張っていて、大内の船は簡単に帰れません。大任の乱では、大内氏は細川をやっつけるために3,000の兵を率いて京都に上り、ものすごくやっつけるんです。細川氏の方はこれは大変だということで、後方の攪乱を企むんです。大内氏の伯父さんにあたる人が南栄道頓という出家したお坊さんなんですが、この道頓に「おまえは甥からいためつけられているんじゃないか。反抗をしろ。」と言って反乱を起こさせたんです。これが大内の内乱なんです。そしてこれに組したのが、かつて大内から追い出されて対馬の方に逃げていた少貳というのが、もともと太宰府の大將だったんですが、その少貳が太宰府に攻め込んでくる。だから北九州、福岡方面はみんな細川の軍旗が一時翻っているから船は見られないとそこにも書いております。

では、2ページ目の終りに書いております、なぜ雪舟は田川に着いたかというのはもうおわかりの通り。どこに着いたか。これは年表の中頃に筑の前州に着くとあります。下から4行目に“3号船は北九州に着くか、筑の前州に着く”というのが、この島隠漁唱という本の中にも出ておるそうです。それでは前州とはどこか。結論を先に言わなければなりません、それはみなさんこの地方でなぜここに来たのか、どこに着いたのか。それは柳川あたりではないか。いや糸島あたりだろう、これが2番目。北九州の芦屋の沖ではないか。芦屋の沖には船がたくさん沈んでいるといえます。だからあのあたりにきたのではないだろうか。いや泉州堺に雪舟は1号船か2号船にのって、その頃三隻とも帰る時は喧嘩ですよ、博多に着いたらまず取り上げられると思うので、1号と2号は遠く南九州を回って土佐に着いてるんです。しかしなぜ土佐に着いたか私はそれは十分にはわからないんです。しかし京都に帰れば危ないんです。泉州も危ないんです。しかし泉州堺に乗って帰ったという説もあるんです。そこで私が考証しているのは、これは非常に大切なところですが、柳川あたりであれば博多のどこかに上がる。そして船はたくさんの貿易をしているので、ほったらかしにするわけにはいかないんです。大内には、嵐がすんだら持って帰らないといけないという正使などの人には役目があったと思うんです。しかしその考証はさておいて、雪舟は八木山を越え、八木山というのは博多の方からくる峠、田川に入るところの烏尾峠を通過して川崎に入り、川崎から英彦山を通り大分へ行ったんじゃないかというの

が一つの道。それから2番目には糸島あたりであろうか。糸島から今のような道か、こんどは博多の裏に回って太宰府の近くに筑紫というところがある。その筑紫から米山峠というのがありまして、私も何度か通ったことがあるんですが非常に近いんです。それを越えて隣の山田市に来て、そしてこの雪舟庭の荒平に来たのではないだろうか。それから英彦山に行ったか。三つ目の意見としては北九州の芦屋に来て、芦屋になぜ来たかという、井上蘭崖という人の説では芦屋は有名なお茶の釜の産地なんです。その茶釜の下絵には雪舟の絵とか、狩野派の絵があると。私は見たことはないんですが。だから芦屋に来たのではないかというのもあながち否定はできない。芦屋に来て、直方を越えて、この川崎に来たのではないか。いやそうではなくて、彼は南九州の薩摩に上がる、玄樹というのは薩摩の人で彼に朱子学をすすめますが、その薩摩に上陸してたまたま英彦山の山伏さんが来ておった。その山伏さんに“豊後の国に行きませんか。豊後のさらに奥には英彦山がありますよ”と言ってむこうからきたのではないか、というような意見。あるいは泉州堺に上がって堺から京都へ行こうと思ったら京都は応任の乱で荒れていますので、中国路を歩いて安芸の国も歩いた。あそこの国にも雪舟の庭があるんです。そしな山口には寄らずに大分に来たという説もあると申し上げておきます。ここで大切なことが一つあるんです。後で申し上げますが、実は法光寺というお寺が田川市の川宮と添田にあります。法光寺を開いたのが天然和尚という人で、大内氏の一族として山口に生まれた。その方が長府で勉強しながらやがて京都に上って、蓮如上人様に会っていたという。この上人というのは真宗の八代、その蓮如さんに会って真宗を広げるために門司までおいでた。門司までおいでた後に10号線を下って中津、大分へ行ったと。田川へはその四代後が来た。ところが明日おいでますと、荒平の雪舟庭には案内板があって、それには雪舟が烏尾峠を越えて茶屋の主人に聞くには「あそこに見えるお寺はなんというか。」「実は法光寺といいます。天然和尚がおられます。」「それはなつかしいな。」と書いてあります。これはあっちがうそを言ってるのではなくて、これはこの地方で有名な本にそう書いているんです。伝えられていると書いていれようそではありませんから。ですけれども、実際に検証してみますと年代的にあわないんです。しかし、なぜ雪舟が田川に来たかということに触れておかないといけません。ここでその理由を確実におさえておきます。

2ページの雪舟が田川荒平藤江氏を訪ねたのは何故か。英彦山の泉蔵坊や亀石坊を訪ねたのは何故か。いまから申しますのは新説です。私はお寺の記録を見せてもらったんですが、お寺のご隠化さん、ご隠化さんというのは真宗での和尚さんということなんですが、真宗の2つのお寺（添田と田川の法光寺）を今回訪ねました。その中に豊前は大内氏の勢力範囲で京都のような大乱もなく、非道も少ない。大内氏がここを治めていた。大内の領土だったことがあるんです。2番目、雪舟も大内で聞いていた豊前平家、ここが新説なんですが、豊前平家の力の強いこの田川に来たのではないか（法光寺記録）。北九州長野城というお城は、法光寺のご先祖なんです。しかも明日皆さんが訪ねる荒平の藤江氏は平家の落人説があるんです。後からスライドを見てもらいますが、古い代々のお墓があるんです。

こういうところにして雪舟の庭の荒平は正に山寨、山の城なんです。行ったら驚きますよ。高い所に庭がありますが、一度水の手を切りますと山寨で前は泥の海になるところなんです。長く持ちこたえるうちに他との連携をとりながら、いよいよになれば去ることもできるという天然の山寨なんです。だから雪舟は流浪の中にも安定した場所を求めたんではないでしょうか。あるいはその頃の英彦山は、不輸不入といって守護や地頭になにもわずらわされない一番強い時ですから、修験者・山伏と共に動くこともできるし、「山伏さん、頼むよ」と言えば安住することもできたんです。だからどの本を読んでも山口に帰ってきたかどうかわからないんですけど、少なくとも6年から8年は未詳の時代があるとどの本にもかいてある。だから雪舟がこの地方に来たのは間違いない。

では、今から氷見教授がやりましたスライドをご説明いたします。(スライド)ここが英彦山なんです。ここが明日皆さんが行かれる荒平、そしてここは昔の川崎の駅、これは昭和20年代に作られたもので役場がある古い絵をスライドしたものです。そしてこのところが荒平なんです。そして向こうのところに英彦山、一の岳、二の岳、三の岳という鷹巢三山。これは1,200m位の山で、この辺りに雪舟の庭があります。山の向こうのここにもう一つあります。津野というのはこちら側で、後からです。はい、どうぞ。(スライド)これが明日おいでる荒平雪舟庭の入り口です。一度堰を切ると泥沼になったであろうとおもわれる場所です。そしてここで荒平の方々がたくさん一緒に生活していた。ここは亀密といって、亀に関係した密なども作ったようです。はい、どうぞ。(スライド)藤江氏の魚樂園です。魚樂園の姿を見てもらいますと、文部省、あるいは県教育委員会が魚樂園と書いて、魚楽というのは江戸時代の村上仏山という人が来たのであります。これは日本の漢詩辞典にも出ている全国的に有名な人ですが、京都郡という行橋のところの稗田の水哉園にいたんですが、この魚樂園に4回おいでて詩を作っています。詳しくご紹介できませんが、詩経の大雅篇の一節に「人、魚共に楽しむ」と書いて魚樂園と名付けた。この方に魚樂園の主人が「300年たったけれども名前がないのでつけてくれ」といったところ魚樂園と名付けたそうです。はい、どうもすみません。(スライド)これは雪舟庭の入り口です。ここに当主とお客がおります。昔ここに土塀がありました。はい、どうぞ。(スライド)この土塀です。これを見ればですね、室町時代とはわからなくても古いなど、雪舟庭の面影をさらに古めたものです。これは台風19号が来たために屋敷が荒れ、重機を入れなければならないということでこれを壊しました。どうぞ。(スライド)この写真はよくでる雪舟庭を山の方から見たもので、この屋敷も明治26年の火事で焼けたと聞いています。これは2回火事があったんです。明治4年または6年と明治26年です。はい、どうぞ。(スライド)これが本当の雪舟庭です。こういうこともいいです。景色は家を入れるといいけれども、雪舟が庭を作った時はやはりこちらから、座敷の方から見たはずです。だからこういうような石組やつつじ、槇の木があったりいろんな木があります。そういうことを申しあげました。こちらのところには、砂を沈める沈砂池という池もあります。これが鶴を形取っている池ではないかと。先程ちょっと落しましたけど、鯉が2匹前のほうで

泳いでおりましたね。そしてこれが亀石といって首をもたげて、これが亀の甲で、これが足ではないか。蓬萊の思想で神仙思想といって、ここも英彦山の庭もこの蓬萊を取り入れた造りであります。はい、どうぞ。(スライド) はい、これが鶴を思わせるもの、これが亀の首といわれております。はい、どうぞ。(スライド) これが秋の雪舟庭。明日のサミットの会場になっておりますところの景色です。どうぞ。(スライド) はい、これが冬の景でございます。はい、どうぞ。(スライド) はい、これが土塀があったころの景色ですが、この山門はまだありますがここが無くなっております。はい、どうぞ。(スライド) はい、これが奥様、今のご当主です。これは亀の甲、首で鶴と亀との姿を示しています。はい、どうぞ。(スライド) これはこの家の家紋でございます、藤川姓を名のる方々もそれぞれ家紋が違います。藤江も藤川も出は同じであります、また藤井と名のった時期もあったようです。はい、どうぞ。(スライド) これは池の奥にある墓所でございます。この墓は名前を刻んでいるのが1代からで、実はその前6、7代は平家落人説の通り平家だったのを憚って名前をはぶいているそうです。しかし立派に祀られております。はい、どうぞ。(スライド) ここのところが見張所だったと思われる組石とか、茶碗のかけらなどがあるし、これは石垣がたくさん段々があります。今は新しい庭などを前の当主が作ったりしていますが、前はここに大集落をつくっていた、こういわれています。火事のために明治以降家が分かれたといえます。はい、どうぞ。(スライド) 魚樂園の入り口にけちをつけましたけれども、正しいことを言うておかなければなりません。これはフィクションというか物語をよく書くといいですね。あの煙がでてるのはどこか尋ねると、あれは天然和尚のいる法光寺です。それは懐かしいなど。しかし天然和尚はその頃京都におられたんじゃないか。しかし伝えでございますから又大切にもしたいと思えます。はい、どうぞ。(スライド) はい、これも雪舟庭でつつじが咲いているのを、最近遠くから撮ってもらったものです。はい、どうぞ。(スライド) 雪舟の庭はここでございます。明日ここへ参りますが、こう行くと英彦山でございます。山田の方へはこう行きます。はい、どうぞ。(スライド) 先程の氷見教授の報告で、同じ町内の真崎の公門原に雪舟の庭があったと、柳武甚三郎という人が明治の始めに覚書に書いております。ここのところには土を取ったあとがあって、大きな山がこうあった。はい、どうぞ。(スライド) これは添田で、英彦山を目指してずっと行くと、このように火ノ口庭の雪舟の庭が現在でも残っています。60坪ばかり。これは槇の木、約400~500年の木といえます。これは櫨。これは水門があるんです。ここの当主は氷見教授が来た時に雪舟は生きた絵を掘り付けたと言って感動させているんです。殺し文句ですね。こういうことを言うと学者はう~んとうなったんでしょう。はい、どうぞ。これはそのところの雪舟の庭でございます。はい、どうぞ。(スライド) これも火ノ口庭の立石でございます。昔は石の配置をする石立僧というのがいたなんてことを書いています。はい、どうぞ。(スライド) これは先程のところから見た英彦山の姿です。それからこれは宝ヶ岳という豊前富士といわれるもので、これは添田の中に入ります。はい、どうぞ。(スライド) これは東をみると岩石山というこれも有名な城跡ですが、この岩石山の向こうを

雪舟は歩いていったんではないかと、雪舟は不思議と英彦山の麓の方には作らなくて、津野の方に2つほど庭を作っています。はい、どうぞ。(スライド)そしてこれは金ノ原という大きな高原があるんですが、その高原から添田を望んで、ここが鷺越え、この峠を越えて津野の方へおりていきます。はい、どうぞ。(スライド)こんどは添田の方から撮った岩石山、この山のここを越えて津野へおります。はい、どうぞ。(スライド)そうしますと、これは大きなダムなんです。油木ダムという北九州市の水源になっていますが、ちょうど水の無い時でして、村島先生に写真を撮っていただいたんですが、このところに石垣が見えますがこの下のあたりに雪舟の庭があったといいます中野庭、あるいはこのあたりに宮末庭があつといいますが、ちょっと格が落ちると氷見教授は書いています。今はダムの下です。はい、どうぞ。(スライド)先程の英彦山の玉屋神社というところに雪舟は一番先に來ただろうといわれています。入り口を写真に撮りました。どうぞ。(スライド)玉屋神社というのは2kmほど奥へ行ったところなんです、車で行ったんですが雨で中へいけないんです。雪舟の庭跡とは書いてないんですが、泉蔵坊の庭跡というのがここにある。これは氷見教授も井上さんも誉めている庭なんです。今は藪でわからない。はい、どうぞ。(スライド)これは亀石坊という英彦山の現存の庭で、荒平の魚樂園と添田の亀石坊と対句になるほど有名な庭です。これは石段です。どうぞ。(スライド)その謂れを書いています。昭和4年に文部省が指定しています。その謂れを書いています。はい、どうぞ。(スライド)それに対して亀石坊の昭和4年に書いた庭というのがたっています。はい、どうぞ。(スライド)そしてその中の池の西に面した方です。一部でございます。はい、どうぞ。(スライド)これが亀石になります。ここに鶴石があるといわれていますが、こらが明るくなっていますが、19号台風で木が全部倒れてしまって、この杉苔が全部反り返っていました。非常に荒れている。はい、どうぞ。(スライド)はい、これが庭の一部。ただ雪舟が庭を設定した時にはこの柴垣はなく、後から木を植えています。こういうことをすると自然が壊れるんじゃないだろうかと氷見教授は書いていました。はい、どうぞ。(スライド)それです、先程の庭のところで写真に写しませんでした、大国神社という建築は築山を崩してまでの仕末です。そこの当主から聞きましたが、非常に惜しいなということを感じました。原形を崩してはいけないなということです。ちょうど時間がきましたがもう少しだけ、はい、どうぞ。(スライド)これは香春の夏吉の片辺というところにも、雪舟がこの辺りに庭を作ったんじゃないだろうかとわれ、今は崩してしまってありませんが、有名なぎぎたる香春岳とよばれる石灰岩の山なんです。一の岳、二の岳、三の岳とこういう山がある。はい、ありがとうございました。

大変早口で、十分な内容にわたってはまだまだお話すべきことがあるんですが、これくらいに留めまして、最後の4ページを開けてもらいますと、荒平の雪舟の庭、英彦山の雪舟の庭共々よくこの地方で文化を守り伝えてきたなと思います。個人で守り続けてきた荒平の藤江家に敬意を表しますし、地域荒平、川崎に敬意を表したいと思います。英彦山においても同じことがいえるのです。雪舟の庭についてはもう少し資料を持っているんです。

というのは、大鶴という大分の資料等あるんですが、時間の関係で割愛します。雪舟が最後に世界の巨匠として450年祭では表彰されているんです。日本では人の真似をせずに堂々と描き、中国では異邦人の衝撃といわれるほどの評価を得た雪舟とは本当に素晴らしい人です。それが、このような雪舟サミットで、大野町、総社市、益田市、山口市、芳井町という因縁、縁のある方々が集まっているというのは川崎町のおおきな誇りであると思います。まだまだ十分にお話申し上げなければならないことがたくさんあるんですが、時間を超えましたので非常に名残惜しいんですが、ここで雪舟の片々、ある姿を報告させていただきながら、私のお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

司会

雪舟のことにつきましては語り尽くせない、そのような気がいたしました。もう一度藤澤先生に拍手を送ってくださいませ。(拍手)

やはり雪舟に縁のある方々ばかりがお見えでございますので、もっといろんなお話を聞いてみたいところでしたが、これからまたステージの入替えをいたしまして皆様にご覧いただくわけですが、入り口のところにジュースをご準備させていただきました。お待ちになっているあいだにどうぞお召し上がりください。

この次は国際フォーラムの報告でございます。